HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	鈴谷期の銛頭
Author(s)	前田, 潮
Citation	サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅 : 日ロ共同シンポジウム, 5, 101-106
Issue Date	2002-02-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73779
Type	proceedings
File Information	101-106.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

鈴谷期の銛頭

前田　潮(筑波大学)

続縄文文化期には北海道を中心とする北日本の沿岸地域において回転式銛頭の製作・使用の発達に画期が認められ、海獣狩猟を軸とする沿海的生活の開花を今日に示している。そしてこれに後れて北海道オホーツク海沿岸～サハリン南部に出現するオホーツク文化において海獣狩猟技術の発達は最盛期を迎えることとなることはよく知られている。また、筆者は両文化の海獣狩猟技術の間に系統的な関係が存在する可能性について論じている（前田 2000)。そこで問題となるのは鈴谷期における銛頭の系統論的な位置であると考えられる。同期がオホーツク文化の形成過程においてどのような歴史的位置を占めたのかについては議論の分かれるところであり、その中で銛頭の有する資料的価値は単に技術の系統論にとどまらず、海獣狩猟を生活の基軸に据えた同文化の歴史的立場を考慮するならば、この文化の動向を明確に反映した指標物として重要性を帯びたものであることは自ずと明らかなところといえよう。

ここでは、これまで明確な出土例が少なく注意されることの少なかった鈴谷期の銛頭およびその可能性のある時期の出土例を紹介し、その型式論的、系統論的位置を明らかにし、これによって当期の歴史的位置づけに言及したい。

出土事例

鈴谷貝塚

例品１～１２（Fig.　　）

ベラ・カーメンナヤチャシ

シュービナの 1992 年の第１次調査に際して同遺跡の３号住居址（南貝塚期）の掘り込みによる破壊を免れた下層（鈴谷期）の包含層から以下の一群の銛頭の出土例が得られている。

例品１３～１７（Fig.　　、ｼｭｰﾋﾞﾅ 1999 第８図３）

アジョールスク遺跡

６号住居址の第２層（鈴谷式が優勢で、南貝塚式も得られている）において回転式銛、カエリ式銛頭各１点が得られている。所属時期は銛頭のタイプから見ても南貝塚期まで下る可能性は低く、鈴谷期の可能性が高いといえる。

例品１８（Fig.　　、ﾜｼﾘｴﾌｽｷｰ･ｺﾞﾙﾍﾞﾌ 1976　　第 64 図 1)

利尻島利尻富士町役場遺跡（利尻富士町 1995)

Ｉ－Ｄ区の包含層（第３層）中から１点の回転式銛頭が出土している。同層は上層では刻文式、十和田式など鈴谷式を除くオホーツク式土器片が 190 点、鈴谷式土器破片が 346 点、同層下面では前者が 10 点に対し、後者は 127 点各々出土し、上層と下層の間に明確な土層を区分する差異は認めがたいと報告している。銛頭の出土の詳細な記載はないが、これらの点から鈴谷期～刻文期に属する可能性が認められよう。

例品１９（Fig.　　、利尻富士町教育委員会 1995 第 30 図１）

以上が現在知られる鈴谷期および鈴谷期の可能性を含んだ銛頭の出土例であるが、この

ことから次の点が明らかといえよう。

まず、鈴谷期に明らかに伴うといえるシュービナの調査になるベラカーメンナヤ・チャシの出土例や伊東信雄氏の鈴谷貝塚における所見から見て、単索孔、単距の閉窩式銛頭（「C群」）はこの時期に行なわれていたことは確かであるといえるとともに、他の多くの同型例もこれによって当期に所属する可能性が高く、この時期における普及型とすることができよう。さらに、これらの中でベラカーメンナヤ・チャシの一群（例品１３，１４、破損品）が銛先鏃を含まない本体の長さが８ｃｍ前後でサイズの点で小形であり、また体側間の厚さが 1ｃｍに満たない薄手で扁平である点は注目すべきであろう。これに類する例は鈴谷貝塚の例品１、２があり、ともに先端に銛先鏃を装着しない点も注意すべきであろう。同貝塚の例品６も小形であるが、厚さが 1.6ｃｍあり、扁平度が少ない。これらに対して、鈴谷貝塚の例品３～５、アジョールスク例（例品１8）はいずれも長さで９ｃｍ、体側間の厚さで１ｃｍを越えて堅牢な印象を与える。材質の点でもこれらはクジラなど海獣骨を使用したと推定されるのに対し、小形のグループはトナカイを含むシカ類の角が用いられている。また、礼文島香深井Ａ遺跡で知られるように十和田期以降の「Ｃ群」銛頭においては大形のグループが優勢であり、小形品はほとんど姿を消すことから見て（大場・大井 1980）、前者はより後出的であると見られる。つまり、鈴谷期の当初のタイプとしては小形扁平で銛先鏃を装着しないものが想定される。

次に注目すべきは、鈴谷遺跡出土の「Ｄ群」の構造を採るグループの中に、比較的細身で、断面が楕円形に近く、双距ガ未発達の一群（例品７～１０）であろう。これらの内特に細身で、先端に根バサミを有さない点で特徴的であり、けづめの突起に注目すると「Ｃ群」と同様銛頭の腹面側に設けられ、その側面観は「Ｃ群」を思わせるものがある。　また、双距は十分発達していない。この点で発達した「Ｄ群」と外見上の相違が認められる。筆者はこれらを型式論的に「Ｃ群」から「Ｄ群」への派生の過程にある一群としてとらえている（前田 1974）。すなわち、「Ｄ群」は鈴谷期の後半の段階にサハリンにおいてＣ群を元に作り出されたタイプであり、その後特に刻文期を中心に広く普及するタイプとしてみることができるであろう。

鈴谷期の回転式銛頭にこれまでのところ茎溝式（抉入式）銛頭（「前田Ａ群」）の明確な出土例が見られない点も注目すべきだろう。無論遺跡調査の今後における進展によって発見される可能性は残るが、少なくとも当期において普及あるいは発達したタイプとしての位置を占めていなかったと見ることはできるであろう。この点はまた、十和田期以降のサハリンにおける「Ａ群」の特徴に北海道・南千島とは異なる特徴がみられることとの関わりも考えなければならないかもしれない。すなわち、Ａ群銛頭は北海道においては柳葉形の体形を呈し、扁平なものから甲高なものまでバラエティがあり、体側面観ではやや背面方向への反りを持つものが主である。先端両側縁に１対のカエリを有するもの（Ａ群２類）や石製や金属製の銛先鏃を装着する根バサミを有するタイプ（Ａ群３類）もあり、また、尾部は燕尾形や３本に分れ、けづめ風に仕上げられたものもある。浅い索溝が体中央部の背面側をめぐり、茎溝に装着された銛中柄先端部を締着させる役も果たす銛縄を結縛する便を成している。茎溝は深さ 1～3ｍｍ程度ながら明確に作り出される。材質は鹿角がおもに用いられるが、獣類の肋骨など用いられている。これに対してサハリンでは扁平で体横断面において背面の盛りあがりが見られず、体の厚さ５ｍｍを越える例は稀である。また、

背面への反りを有するものは見られない。先端は先鋭に削り出され、銛先鏃を装着するタイプはない。銛縄先端を結縛する索溝は形成されず、体側面の両側に抉りをいれることによって解決している。茎溝も極めて浅い。小形品などでは全くこれを欠く例が多く、銛頭と認定するのが困難である。このような特徴を呈するのは材質が鹿角を用いず、陸獣類の四肢骨の一部が選ばれていると推定される例が多いこととも関係するであろう。

このような両地域のA群銛頭の明らかな地域差はおそらく、北海道続縄文文化からサハリンにこのタイプが導入される過程で生じたのであろう。両地域のA群銛頭が同一対象動物の捕獲を目指したものであるか自体も今後問題にする必要があろうが、導入過程自体の一層具体的なトレースが必要とされる。いずれにせよ、鈴谷期におけるA群銛頭の使用は顕著ではなく、次期以降での発達、普及を考えるのが妥当であろう。

次に、鈴谷期におけるカエリ式銛頭についてふれるとならば、これも出土例が多くないが、鈴谷貝塚やベラカーメンナヤ・チャシの例を見るならば、一定の発達状況を看取することができるので、回転式の「C群」銛頭とともに当期における銛猟の形態を構成する基本的な用具であったと見てよいであろう。鈴谷貝塚例（例品１１、１２等）、ベラカーメンナヤ・チャシ例（例品１５，１６等）とも左右対称に配置したカエリを具える点は共通した特徴といえる。また、鈴谷例では先端の銛先鏃装着法として片面にスプーン状の凹面を作り出していることが明らかである。このような特徴は後述するように北海道の恵山文化やその影響を受けたと見られる道北の出土例に共通するところである。

以上の点から鈴谷期における銛頭の存在状況を要約するならば、次の通りとなる。

1、　鈴谷期の銛頭は回転式の「C群」が普及型式であり、これに、カエリ式銛頭が併用される。回転式で茎溝式の「A群」は何らかの理由で受容が遅れ、発達は次期以降となる。

2、　「C群」のうち、小形（全長８ｃｍ前後）で扁平な一群は鈴谷期を特徴付けるタイプといえる。「C群」の出自は続縄文期の同構造の閉窩式銛頭に求められる（前田1974）。

3、　鈴谷期にはカエリ式銛頭も基本的な構成要素であったが、左右対称のカエリ、スプーン状の銛先鏃装着部を有し、これも続縄文文化との系統関係の存在を示すものである。

このように鈴谷期の銛頭が系統的に続縄文期に求められるとする筆者の説は今日においても変更を要しないといえる。そこで次に問題となるのは、続縄文期からの技術継承の具体的な過程と鈴谷期における独自性がどうであったかという点であろう。

続縄文文化の銛頭については木村英明、大島直行らの見解が公表されており（木村 1982、大島 1988a、b、）、筆者も恵山文化およびこれに関連する銛頭の関係を論じた（前田 2000）。そして近年では高橋健が総括的に概念の整理を行なっている（高橋 2001）。これらを通じて概観すると、続縄文文化においては、回転式とカエリ式のほかに複合式（両方の機能を具えたもの）がある（ﾌﾟﾛｺﾌｨｴﾌ 1986、ﾌｪﾄﾞﾙﾁｭｸ 1995）。回転式は閉窩式の「C群」、茎溝式の「A群」の構造を採るものがあり、前者は恵山文化に発達する先端にスプーン状の鏃装着溝を有し、けづめがよく発達し、そのソケット側の先端にカエリ状の突起を有するグループと茎溝式「A群」で、尾部は単距のものと双距のものがある。このほかに「C群」の特徴を示しながらソケットが開窩式のタイプも指摘されている（高橋 2001）。最後の例

は室蘭祝津貝塚と釧路の幣舞遺跡の出土例（(大場編　1962、釧路市埋蔵文化財センター編 1999）であり、ともに扁平な体と角張った外見を呈し、一見オホーツク文化の「C群」を想起させる。前者は縁辺部に破損が見られ、ソケットも使用による破損の結果開窩式の形をとった可能性もあろう。また後者は製作途上の品で、鹿角を薄く縦割りにした様子が残されている。ソケットも加工中の状態が示されているが、体の扁平度が強いためソケットとしての強度が得られないことから完成を断念したともみられる。したがって、両例とも本来開窩式を意図した品か疑問が残ろう。いずれにせよその外形は他の恵山系の例品とは明らかに異なり、鈴谷式の「C群」との関わりが注意される。

鈴谷期の遺跡の分布圏に入る道北礼文島では２，３の「C群」の特徴を有するの銛頭の出土が知られるが、その中で名取武光氏の紹介になる１点（Fig.　　、名取 1933）は体の扁平性の点で鈴谷式に近い形状を呈する。しかし、これが恵山系の銛頭の流れを汲んでいることは先端のスプーン状の鏃装着溝やけづめ先端に痕跡的に残されたカエリ状の突起によって示されている。オションナイ遺跡出土とされているが、出土状況の詳細は不明であるため明確な時期は定められない。続縄文期の所産であることはほぼ間違いないであろう。現在もっとも鈴谷期の「C群」に近い例品のひとつといえよう。

続縄文期においてはカエリ式も恵山文化のもとで大いに発達を遂げ、いくつかの派生型を生んでいる。しかし、それらは基部の構造において「雄型」と「雌型」の相違はあるが、カエリが左右対称に配される点では共通している。また、「雌型」の基部を有するタイプ(高橋第２種Ｂ群）では回転式の「高橋第３種」と同様に先端に鏃装着のためにスプーン状の溝が設けられる。この鏃装着法は道北では「雄型」の銛頭に再現され（Fig.　　）、さらに鈴谷貝塚のカエリ式銛頭（例品１１，１２）に出現している。このようにカエリ式銛頭においても恵山文化の影響は明確にとらえられ、これが道北続縄文期を仲介して鈴谷期に採り入れられたこともまず間違いないところであろう。

では、鈴谷期の銛頭の独自性はどこに認めることができるだろうか。この時期の「C群」の特徴としては前述した通り、体の扁平性があげられる。この特徴は後属する十和田期、江ノ浦・刻文期に引き継がれ、材質がクジラなど海獣骨に転換し、堅牢さを増し、後には大形化した例も認められる（Fig.　　）。利尻島役場遺跡の出土例（例品１９）はその最初期に位置付けすることが可能かと思われる。カエリ式銛頭では続縄文的特徴を継承した鈴谷貝塚例（例品１１，１２）に対して、ベラカーメンナヤ・チャシ例（例品１５～１７）は小形で扁平度が強い特徴を持つほかに、例品１５に見るように根バサミ式の鏃装着溝と鉄鏃が使用される。例品１５については上層からの混入の可能性も全く考えられないわけではないであろうが、鈴谷期における鉄器の出土例はウスチアインスカヤ遺跡においても知られており（ｺﾞﾙﾍﾞﾌ 1995)、ここでは、鈴谷期の所産とみなしておくこととする。これを踏まえるならば、鈴谷期においてカエリ式銛頭に新たな特徴を有する一群が出現したことを意味するといえよう。さらに当期においては「C群」銛頭からの派生としてとらえられ、その後サハリン、道北、道東にわたるオホーツク文化圏の広い範囲に普及する「D群」が出現している(例品７～１０)。このタイプは続縄文文化の内には存在しないものであり、オホーツク文化の前半の普及型ともいえるものだが、材質として一般的にクジラなどの海獣骨製である点においても続縄文期一般の製作法と異なる。「D群」については製作途上品が北海道・サハリンで出土しているが、いずれも大形骨から長方形、板状の２次的素材の

作製を経て銛頭大の羊羹形の３次素材を作製し、これから成形して仕上げる。このような製作法においては金属製利器の使用が不可欠であると考えられる。この製作法が続縄文期においては普及していないことは、その大半の銛頭が鹿角製であることによっても窺える。ただ、続縄文期にも金属器が利用されていることは事実であり、少数ながら出土品も北海道各地から報告されている。そればかりでなく、礼文島浜中２遺跡では骨角器製作に関わったと見られるクジラ骨を金属製利器によって板状に加工した品が出土している（浜中遺跡調査団 2002)。出土層位（Ｉ地点 27 層）はこの品が続縄文期前半であることを示している。しかし、この素材が２次素材としてより小形の骨角器の製作に供されたかどうかは明かではない。したがって、骨角器生産において大形骨を原材とし、２次素材を経て、完成品を製作する方法は続縄文期の内に成立するまでに到らなかったと見てよいであろう。

鈴谷期が続縄文文化期と一線を画するものに茎溝式銛頭の不採用もあげられよう。その理由は明らかでないが、その後、サハリンに遅れて普及する「Ａ群」が、前記したように北海道、南千島に発達するタイプとは明らかに異なる特徴を具えている。しばしば見られる全長５ｃｍ以下の小形品はアイヌ文化の鏃（ルム）や「チロシ」を想起させるものがあり、鏃としての用途を考えた方がよいものもあろう。ただ、このタイプの体前方部に一対の並列する索孔を有する「Ｂ群」タイプが存在することからサハリンタイプの茎溝式も回転機能を具えた、すなわち離頭式の銛頭としての機能を有していたことは明らかであろう。また、サハリンにおいても北海道・南千島と同タイプの銛頭も例外的に見られるが、南貝塚期など後半期に行われているようである（ﾌｪﾄﾞﾙﾁｭｸ 199　）。

以上に見てきたように、銛頭の変遷過程、系統関係からみてオホーツク文化の銛頭は、はじめ、鈴谷期において続縄文文化から閉窩式「Ｃ群」を継承し、その後半のある時期にに「Ｃ群」をもとに「Ｄ群」を派生させた。これは海獣の大形骨を原材とし、２次素材、３次素材の工程を経て完成させる製作法が成立したことを意味する。カエリ式銛頭にも続縄文の影響は色濃くのこる。一方、北海道で伝統的な「Ａ群」銛頭は、鈴谷期より遅れて、地域的特色を帯びた形でサハリンに広まる。

これらから鈴谷期を続縄文文化との間に時期を画するものがあることを窺うことができよう。

引用文献（Literatura）

大島直行　1988a「続縄文時代恵山式銛頭の系譜」『季刊考古学』第 25 号　26~30 頁
1988ｂ「北海道続縄文時代の漁撈具― 恵山式銛頭について ―」『考古学ジャーナル』no.295　13~16 頁
大場利夫編　1962　『室蘭遺跡』室蘭市教育委員会
大場利夫、大井晴男編　1980　『香深井遺跡』上巻　東京大学出版会
木村英明　1983　「骨角器」『縄文文化の研究』第 6 巻 143~165 頁　雄山閣出版
清野謙次　1944　『太平洋に於ける民族文化の交流』創元社
1969　『日本貝塚の研究』岩波書店
釧路市埋蔵文化財センター編　1999『釧路市幣舞遺跡調査報告書』Ⅳ
高橋　健　2001「続縄文時代前半期の銛頭の研究」『東京大学文学考古学研究室紀要』第 16 号　83~137 頁

日本大学文理学部　1966 『樺太の遺物』第 33 図版
浜中遺跡調査団　2002　「浜中 2 遺跡発掘調査報告書（1991—1993）」『筑波大学先史学・考古学研究』第 13 号
前田　潮　1974　「オホーツク文化とそれ以降の回転式銛頭の型式とその変遷」東京教育大学文学部「史学研究」第 96 号
2000　「恵山文化の銛頭」海と考古学第 2 号　15~22 頁
利尻富士町教育委員会　1995　『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』

ワシリエフスキー　R．S.、ゴルベフ　V.A.　1976　『サハリンの古代遺跡　—鈴谷遺跡—　』
(Vasil'evskij　R.S., Golibev V.A.　1976　Drevnie　poseleniya　na　Sakhaline　—　Susujskaya Stoyanka　—　Novosibirsk)
コズイレワ　R.V.　1964　「サハリン島の新石器時代集落址　スタロドフスコエⅡ」　『極東・シベリアの考古学と民族誌』第 1 号　49~72 頁
(Kozwireva　R.V.　1964　“　Neoliticheskoe　poselenie　Starodbskoe　II　na　o. Sakhaline”　Arkheologiya I etnografiya Dal'nego Vostoka, Drevnyaya Sibir' vyousk I 49-72)
シュービナ　O.A.　1999　「南サハリンの防御集落址ベラカーメンナヤ・チャシにおける古代住民の居住時期」　227~252 頁
(Shubina　O.A.　1999　“Etapy　zaseleniya drevnim chelovekom ykreplennego poseleniya belo-kamennaya-chasi na yujnom Sakhaline” Vestnik Cakhalinskogo Muzei no.6　227-252
フェドルチュク